

# 国際校のメリットを活かした学校経営

## — 学校発信を基本にして —

前日本メキシコ学院日本コース 総校長

福島県郡山市立穂積小学校 校長 齋藤 秀峰

キーワード：学校経営

### 1. はじめに

「日本メキシコ学院日本コース」。聞きなれない名前だった。「～日本人学校」というのが普通の呼び方だが、(どんな学校なんだろう)と思った。教育長から、「メキシコ」という国を告げられた時には、漠然と「砂漠、サボテン、暑い国」ぐらいの認識だった。それくらい、名前は知っているもののメキシコのことはあまりにも知らなかった。

初めて乗った飛行機が、メキシコ行き。初めて行った外国がメキシコ。スペイン語を初めて聞いたのがメキシコ。初めてづくしが「メキシコ」という4文字だった。

### 2. 学院の紹介

#### (1) 学院設立の経緯と建学の精神

「日本メキシコ学院日本コース」の前身は、1968(昭和43)年5月に幼稚園・小学校あわせて50名で発足した「メキシコ日本人学校」である。メキシコ市内デルバジェ地区にあった学校は、入学希望者の増加によって敷地と校舎が手狭になり移転問題がクローズアップされてきた。1974(昭和49)年5月、メキシコ合衆国のブラボ・アウハ文部大臣が日本を訪問し、当時の奥野文部大臣と会談した際、日本・メキシコ両国の子どもたちが同じ敷地内で学ぶことのできる本格的な国際学校「日本メキシコ学院」の設立が提唱された。その年の9月、メキシコ合衆国を訪問した田中首相とエチェベリア大統領との会談の結果発せられた共同声明において、早期開設を支援する旨の発表があった。永年にわたって学院建設を熱望していたメキシコ進出企業と日系コミュニティの献身的な努力が実り、ついに1977(昭和52)年9月に現在の「社団法人日本メキシコ学院(LICEO MEXICANO JAPONES, A.C.)」が誕生した。本学院は、日本コース・メキシココースの2コースと文化センターの3つのセクションから成り立っている。

日本コースは、小学部・中学部をもち、日本国文部科学省の定める学習指導要領に準拠した教育を行うとともに、スペイン語・英会話・メキシコ理解学習を実施している。新学年は4月から始まり学校週五日制、二学期制をとっている。

メキシココースは幼稚部・小学部・中学部・高等部・日本語教育部をもち、メキシコ合衆国文部省の定める学習指導要領に準拠した教育(高校部においては、メキシコ国立自治大学の進学基準に準拠した教育)を行うとともに、日本語・日本文化の学習も行っている。新学年は8月下旬から始まる。

文化センターは、両コースの中心に位置してかけはし的役割を果たしている。国際交流室、広報出版室の2セクションに分かれ、両国文化交流の促進を図っている。

2010～11年度は、日本メキシコ交流400周年を迎え、各種行事や記念式典等のイベントを実施した。設立当時の建学の精神「日本・メキシコ両国民の相互理解の増進と教育文化の交流を図り、人類の連帯感を育み、世界の平和と繁栄に貢献し得る国際性豊かな、かつ、国民にとって有為な人材を育成すること」にそって、日本・メキシコ両国の幼児・児童・生徒が、同じ敷地内で相親しみ、将来にわたる友好関係を培っていかうとしている。すなわち自国の文化をしっかりと学ぶことと同時に、異文化を学ぶ中で両文化の相違点にも気付き、お互いの国の文化を理解、尊重しようとする資質を身に付けようとしている。

## (2) 特色ある教育活動

### ① スペイン語・日本語学習・英会話

日本コース小学部・中学部では、毎週1～2時間のスペイン語の学習が、専任のスペイン語講師の指導のもとに行われている。(習熟度に応じて3つにグループ分けをし、少人数で楽しく学習が進められている。)また英会話については、22年度は、小学部1年から3年まで週1時間、4年から6年まで週2時間、中学部週1時間、本校の教諭と英会話専任講師によって進められた。

### ② 交流行事・交流学习

学院内では両コースがいっしょに参加する行事がたくさんある。進行や説明は日本語とスペイン語の両方を使って行われ、両国の言語や文化に触れることができる。また交流週間が設定され、合同授業や遊びの時間などの交流活動も企画される。週に1回メキシココースとの合同クラブも実施されるなど、両コースの交流を深めるための取り組みが行われている。しかし言語の問題、勤務形態の違いの問題などから、実施にあたっての相互理解や調整は難しく、教職員の大きな課題のひとつとなっていることも事実である。



(メキシココースとの交流学习)

### ③ 総合的な学習の時間 (リセオタイム)

本校でも在外教育施設の特性を生かした「総合的な学習の時間」の推進をめざして、小学部では「リセオタイム」という名称で時間割の中に組み込んでいる。リセオタイムの運用については、それぞれの学部ごとに年間計画が立てられ、「国際性」「主体性」「協調性」の育成を3つの大きな目標として、創意ある教育活動を実践しているところである。

## 3. 学校経営の基本

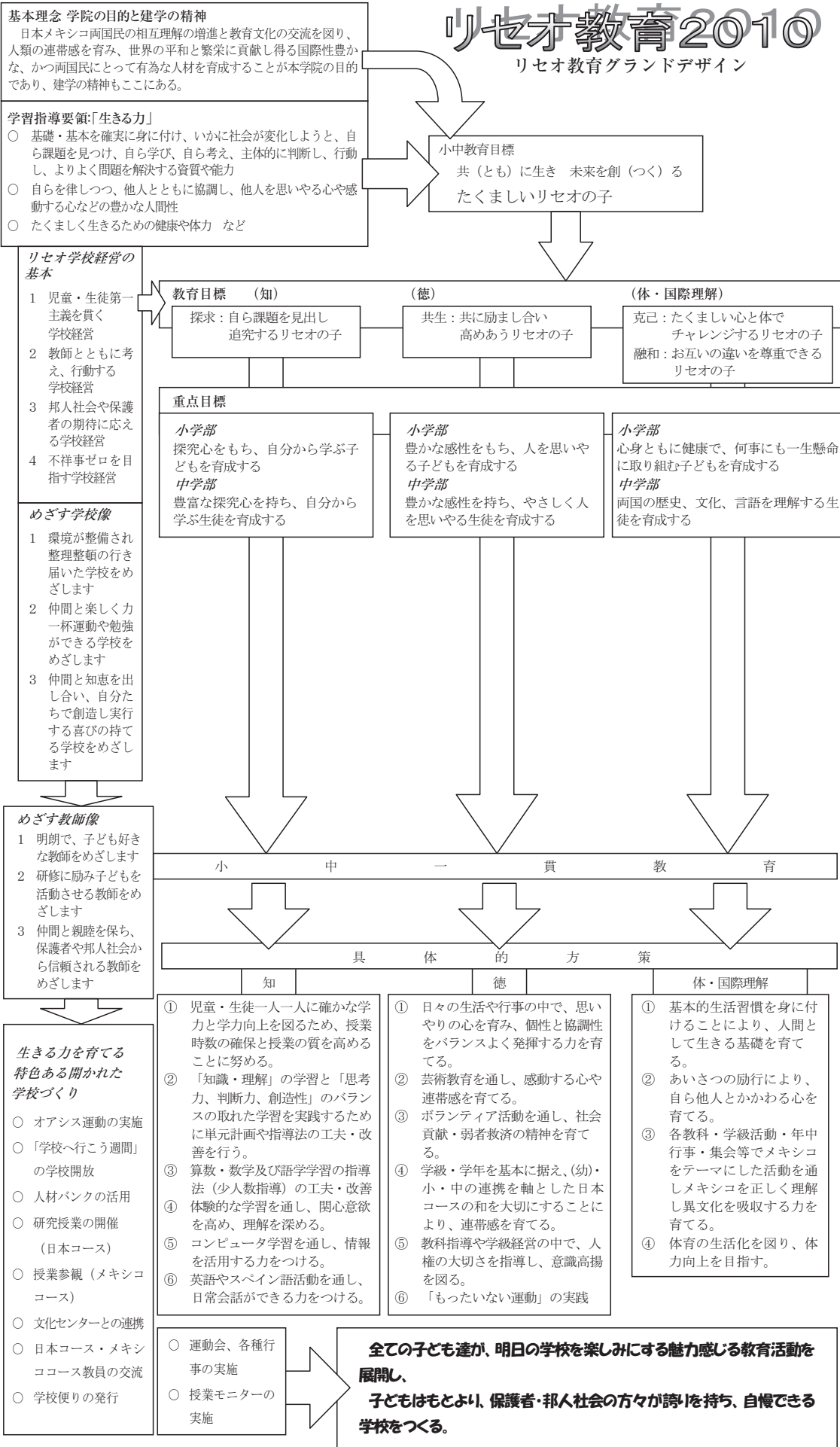
### (1) グランドデザイン (次頁参照)

### (2) 様々な問題点

- ① 派遣教員は全国から集まるため、都道府県によって教育活動に対する考え方が違うこともあった。
- ② 新型インフルエンザ(2009年度)の対応をめぐることは、感情的な問題等も加わり、それが管理職批判へつながった。
- ③ 新型インフルエンザの年(2009年度)、教師側からの学校評価は管理職批判が多かった。
- ④ 教員が外部も巻き込み、校長批判につながり、校長の早期帰国まで画策する動きがあった。
- ⑤ 学級内のいじめが子どもの早期帰国につながり、家族を引き離してしまった。その対応をめぐる教員同士が対立し、送別会まで欠席するという事態を引き起こしてしまった。
- ⑥ 職員室の空気は重く、冗談すら言えないような雰囲気を作ってしまった。
- ⑦ デモや停電の際の学校側の対応について、保護者から批判が多かった。一番多い批判は諸事情で授業時数を減らした分をどこで補うのかというものだった。
- ⑧ 2009年度には教師の学級経営や教科指導に対する批判も保護者から多くあった。
- ⑨ メキシココースの子どもたちや教員と共通で行う行事や交流授業等で行き違いが何度かあり、軋轢が生じた。
- ⑩ 共通経費(両コースからの負担金)の使い道や、負担割合を巡って、理事会で両コースの理事が対立する場面も見られた。

# リセオ教育2010

リセオ教育グランドデザイン



## 4. 問題点解決へ向けて

### (1) 学校発信の学校経営

- ① 学校便り→毎週1回の発行（2009年度は、新型インフルエンザの為5月は休刊）。普段の子どもの様子を保護者や外部の方へ伝えると同時に、学校の考え方も理解してもらった。
- ② 意見交換会→年2回。学校評価アンケートを参考に、問題点を洗い出し、保護者と一緒に考えた。
- ③ 学事報告→月ごとの出来事をまとめ、運営委員会と理事会に提出することにより学校理解を図った。
- ④ 授業モニター→授業参観等の実施を全教職員年1回を目指し、運営委員や理事、保護者や日本語教育部の教師にモニターになってもらい、「子どもの立場で、子どもの目の高さで、子どもの机で」授業を参観してもらう。教師の授業力アップの引き金になると同時に、学校理解、教師理解につながった。
- ⑤ 職員朝会→毎朝、職員同士の連絡・連携を深めるため短時間で行った。事前に話す内容を考え、校長の学校経営について機会をとらえながら、話してきた。月1回の職員会議も同様に実施した。

### (2) 生徒指導の機能を活かした学校経営

自己存在感・自己決定の場・共感的な人間的触れ合い。このことは、学校経営にも生きる機能である。教員一人ひとりの存在感。「いてもらわなければならない教員へ」「いてもいなくてもいい教員」はいらない。まして「いてもらっちゃ困る」教員は、論外である。しかしそういう多少問題を抱える教員も成長させなければならない。それが管理職の役目でもある。また校務分掌の機能を活かし、教員の力をフルに活かす事も大切である。

## 5. 終わりに

3年間は長いようで短い期間であった。この3年間、国内での管理職の経験（教頭6年間・校長6年間）を海外派遣施設でも活かしていきたいと意気揚々と赴任したものの、理想と現実のギャップに悩みながらの3年間であった。

「一期一会」。日本にいたら会えないであろう日本全国からの子どもや先生方、それにメキシコ在住の日本人や日系人の方々。メキシコ人の方々。失意のどん底にいた時に我が事のように同苦し、一緒に涙を流して下さったことは忘れられないし、忘れてはならないと肝に銘じている。教員の時にもっと力をつけていたら先生方に適切なアドバイスを与える事ができたらろうにと思うと、3年間一緒に過ごしていただいた先生方には、申し訳ない気持ちでいっぱいである。今後もこれらの経験を日本での教育に活かしていきたいと考えている。

最後になるが、3月11日の東日本大地震では多くの励まし、さらにメッセージまで、それも元運営副委員長さんが直接、福島県郡山市まで届けて下さった。それをPTA総会時に紹介する時間を頂き、元運営副委員長さんからの教育への熱い思いが、会場の保護者の方へ伝わった。「まさかの時こそ、真の友」という言葉があるが、私はそれを実感した。この場を借りてお礼を申し上げたい。